

勝田高校図書館だより

平成30年度 第3号

平成30年6月29日発行



クラスマッチが終わりました。応援練習の音が校内に響き、高校野球の県大会の開幕を実感します。高校野球と言えば夏と青春の象徴ですね。

今年は梅雨らしく、雨が続いた時期もありました。登校時に雨に濡れてしまった人も多いでしょう。皆さんは雨は嫌いですか？時には、降りしきる雨を眺めたり雨音を聞きながら、本の世界に心を遊ばせ、普段とは違う時間を過ごしてみませんか？

雨音は音楽に聞こえる時もあります。雨は、遠い記憶を蘇らせ、また未来を思わせる、日常とは異なる時空への扉を開いてくれる不思議な自然現象のような気がします。雨の日は、図書館で静かな時間を過ごしてみませんか。

❖6月は、図書館のカウンター当番を1年生が担当しました。❖

○新潮文庫から出されている「高校生に読んでほしい50冊」という冊子があります。今年は、「泣」「考」「恋」「驚」「熱」の五つのテーマに分類されて本を紹介しています。これに倣って、各クラスの図書委員が五つのテーマを担当して、それぞれにお薦めの本を選びました。今月中にコーナーが完成します。図書館に入ってすぐ左手の棚をご覧ください。



○6月担当の図書委員の一人に、「雨」が降るシーンが印象に残った1冊を紹介してもらいました。手に取ってみませんか？

『いま、会いにゆきます』 市川拓司



どの場面も心に残りますが、特に印象に残っているのは、死んでしまったはずのお母さんが雨の日に登場する場面です。記憶がなく、最初は幽霊かと思いましたが、読み進めていくうちに段々真相に近付いていきます。タイトルの意味が分かったとき、暖かく、優しく、それでいて少し切ない気持ちになります。家族愛が溢れる作品で、読んだ後には「家族っていいな。」という優しい気持ちになれるお薦めの一冊です。

六月のうた (詩)



『雨の気まぐれ』 北原白秋 (最後の一連のみ)

しとしと、しとしと、絶間なく雨はふる、ふりそそぐ、葉から葉へ、しとと滴る。
深緑の闇い夜ーふる雨の黒いかがやき、
廃れたる椽の葉に古池に 霊の底の秘密へ、
日がな終日、昼間から、今日の朝から、昨日から、遠い日の日の夕から、
ふりつづく長い長い憂鬱の単音律、
その青い雨……霰くさい雨……投げやりの雨……
辛気くさい静かな雨、かなしいやはらかな……生温い計画の雨。
雨……雨……雨……

北原白秋の「雨」を歌った二つの童謡をご存じですか？「あめあめふれふれ かあさんが じゃのめでおむかい うれしいな ピッチピッチ チャップチャップ ランランラン」という、雨を楽しむ『あめふり』と、「雨がふります、雨がふる。遊びに行きたし、傘はなし。紅緒の鼻緒も緒が切れた。……雨がふります、雨がふる。晝もふるふる、夜もふる。雨がふります、雨がふる。」という『雨』。片や雨を喜び、片や雨の日のもの悲しく憂鬱な気分が詠まれています。

私は、二つの「雨」はいずれも虚構の雨だと感じています。雨の日の光景を、子どもの視点から印象的にそして象徴的に詠み上げたものであろうと思います。『雨の気まぐれ』は、作者が26歳の時の作品です。上の二つのように子どものために作った童謡ではありませんし、青年特有の、解消しようのない思いや衝動を感じます。梅雨時の、身も心もよどみ塞ぐ中で、その単調な湿った暗さに、五感が反応し不快な幻想を抱いているかのような不安定さと不健全さを感じます。やはり雨は憂鬱なものでしょうか？

1年生は今授業で読んでいる、2・3年生は1年あるいは2年ほど前に読んだ『羅生門』を思い起こしてみてください。物語は「ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。」と始まります。まさに「雨に降り込められ」「行き所がなく、途方に暮れていた」下人が、「明日の暮らし」という、現在日本に暮らす私達の多くが当たり前に約束されていると信じているはずのものを、「どうにもならぬこと」と言わざるを得ない状況で、何に葛藤し、何を選択したかが物語を進めていきます。憂鬱でどうにも身を処せない下人を包み、更に追い詰めていくものの一つが、やまない雨なのです。再度問います。皆さん、雨は憂鬱ですか？

目に映る雨の表情は、見ている自分の心の投影かも知れません。同じように雨に降り込められても、休日に雨音を聞いているのと、通学する朝に雨脚が強まっているのを見るのとでは、受け止め方も違います。梅雨は日本の気候の特徴の一つです。雨を堪能して、雨のベールの向こうにある見知らぬ世界に想像を飛ばたかせることが出来るのも、この季節の魅力かも知れません。皆さんが様々な姿の雨に出会えるよう祈ります。